

## 事後評価報告書

フィリピン台風 30 号(フィリピン名 Yolanda)関連 国際緊急研究調査(J-RAPID)

1. 研究課題名: 「フィリピンの災害対応を目的とする地理空間情報シェアリングシステムのプロトタイプの開発」

### 2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者: 東京大学 空間情報科学研究センター 教授 小口 高

2-2. 相手側研究代表者: Advanced Science and Technology Institute, Knowledge Management Division, Division Chief, Rene C. Mendoza

3. 総合評価: B

### 4. 事後評価結果

#### (1)研究成果の評価について

フィリピンの気象センサネットワークの豊富なデータを日本の GIS サーバに取り込み、非リアルタイム系で行った台風来襲時の降雨分布の時間変化の可視化や土砂災害の危険域の解析・予測などは、重要な成果として認められる。また、相手側が構築しようとしているデータ保存に関するインフラストラクチャー構築に貢献したという点での意義もあると考える。

しかしながら、初期の計画に沿った調査研究は進まなかった。これは相手側との面識が不十分であったことに加え、相手側のインターネット通信速度等の情報通信基盤の性能についての事前調査もないうまま、日本側の調査研究計画をそのまま持ち込もうとしたことが大きな原因となっている。相手側の異なった研究基盤環境は当然に予想されることであり、それに対応できる国際共同研究を効果的に推進する方策を準備しておくべきであった。また、日本とフィリピンのサーバをリアルタイムに接続することの現実性を、計画時点でより慎重に考えておく必要もあったのではないだろうか。フィリピンチームが何をどこまで実施したのか、それが本研究の成果にどのように活かされているのかなども十分明確になっていないため、今後、今回の経験を教訓として、更なる研究を進め、災害対応のプロトシステム構築と運用および大規模システム構築の指針を提示できるようにしてもらいたい。

#### (2)交流成果の評価について

本研究では、両国チームともに若手の研究者が相互交流を行いながら参画しており、結果として、両国間の長期的な共同研究を可能とする基盤づくりにつながったといえる。一方で、体制という点では、GIS データを解釈につなげるための気象学・陸水学などの専門家、防災につなげるための都市工学や行政機関などの参画が十分でなかったように思われる。アジア地域では、気象災害に関する研究者は多く、それらの研究者との交流を視野に入れることにより、今後の研究の展開がより明確になると考え

る。加えて、ワークショップ・セミナー、シンポジウムの開催を含め、継続的な交流、成果の積極的な発表が求められる。

### **(3)その他**

研究代表者の 20 年にわたる海外共同研究の経験を生かしたマネジメントによって、両国の次の世代を担う 30 歳代の若手研究者の連携ができたと理解できる。今後の両国の長期的な連携に期待したい。